

研究紀要の発刊にあたって

前年度の反省に基づき「伝え合う力の育成」をメインとした研究へと絞り込み、今年度の校内研究をスタートさせました。

研究を進める上で、テーマを『すすんで学び豊かな表現で伝え合う児童の育成』と微調整し、サブテーマは前年度を受けて『国語科における「話すこと・聞くこと」の指導の工夫を通して』として、引き続き国語科を切り口に取り組んできました。

学力問題が大きく取り上げられる昨今、宮城野の子どもたちにつけたい力として考えられたのは、「伝え合う力」の育成でした。国語科の目標の中心とも言うべき「伝え合う力」の育成に、各学年部において研究テーマに基づき取り組みました。

その結果、十分とは言えないまでも、発表をするということについては、国語科に限らず各学年部で目に見える成果を上げることができました。

6年生は修学旅行の発表会、5年生は野外活動の発表会、4年生は校外学習の発表会というように各学年が機会のあるごとに「伝え合う力」の育成を念頭に置き、共通行動を取ることができたことが何よりも大きな収穫でした。

さらに、各学年がそれぞれ上の年の発表を聞く機会を設定したことも「伝え合う力」を育成する上で大きな効果をもたらしました。上の学年の発表を聞くことにより自分たちの発表を見つめ直したり、新たな目標を持ったりすることができたことが子どもたちにとっては大きなステップとなったようです。

今後は、国語で学び、通常の生活の中で発展させ、定着させていくことが、目標となってきます。

また、このような取り組みをもとに、6年間を見据えて系統的に学習していくシステムが構築されれば、本校の特色となり、本校で学習した6年間で目に見える形として「伝え合う力」を育成できるものと考えます。

この取り組みが本校の特色として定着していくようになれば、研究が研究で終わらない理想的な活動となっていくことでしょう。

次年度は、この活動の日常化としての定着を目指し、研究を進め、本当の意味で子どもたちの力となる研究となるよう全職員力を合わせがんばっていきたいと思います。

宮城野の子どもたちを客観的に見つめ直し、この研究に意欲的に取り組んだ研究同人としての教職員を誇りに思います。

最後に、今年度の研究を進める上で大きな役割を果たしてくださった仙台市教育センターの浅野郁子先生、中山小学校の後藤敦子先生や様々な研究公開校、そして、研究視察校の先進的な研究成果に感謝し巻頭言といたします。

平成18年3月

校長 熊谷 義也